

# § 1 . 計画の目的

## 1 - 1 . 計画の目的

森林の自然環境に果たす役割の重要性が叫ばれている今日、地球規模での様々な取組みが始められている。

これまで、林業等の第一次産業従事者によって森林が守られ、国土の保全に大きな役割を果たしてきたが、林業の衰退とともに人手が入らなくなってきており、里山の荒廃が進むことにより生態系に変化をもたらすなど、森林が持つ本来の機能が発揮できなくなってきている現状にある。

近年、にいつ丘陵地帯において、文化、交流等を目指した一大拠点が整備されつつある一方で、里山林の放棄等による山林の荒廃が年々進んでいる状況の中、真に自然と共生のできる地域資源として、よりその価値を高めることのできる適切な施策が早急に講じられることが重要となっている。

又、市民の間でも里山を守ろうという気運が大いに高まっており、シンポジウムの開催、ボランティア等による間伐の実施、体験学習・自然観察会が活発に行われている。

本計画は、人々の生活に深い関わりをもってきたにいつ丘陵について、これまで報告されてきた諸計画書を参考に、里山の再生（保全・活用）に向けた総合的な基本方針を示すものである。なお、対象エリアは、にいつ丘陵のうち新潟市地域(約1,000ha)とする。

## 1 - 2 . にいつ丘陵の位置づけ

人々は昔から、にいつ丘陵・角田山・多宝山、信濃川・阿賀野川、鳥屋野潟・佐潟・福島潟等、森林・海・川・潟等の豊かな自然とともに新潟平野で生活してきた。その中でにいつ丘陵はかつて里山として食料採集や生活資材供給の場として利用され、現在に至っては、観光拠点や憩い・安らぎの場等として人々の生活と深い関わりを持ち続けている。

こうした状況の中、にいつ丘陵は今後、「都市近効林」として、災害を防ぎ、水源を涵養し、空気を清め、生き物を住まわせ、美しい景観を保つ等の森林が持つ環境保全機能とともに、81万人市民の人々に対する保健・休養機能を有する「健康づくりと観光・レクリエーションの拠点」として再生し、その価値を高めていくことが求められる。

今後、各種施策を通して、このような「環境林・保健休養林」を推進していくことにより、高齢化に対応した健康増進、世代間の交流、観光の振興促進、地域愛着心の向上等が期待される。

にいつ丘陵の位置づけ  
新・新潟市民の共有財産として  
「環境林・保健休養林」



図1 - 1 . 新潟平野と新津丘陵

## 1-3. 里山とは、そして里山の働き

### (1) 里山とは

#### 里山の概念規定

- 人里の近くにある山(林).....地理的側面
- 日帰り可能な範囲
- 人が生活に利用してきた山(林)...文化的側面
  - 燃料 柴(しば) 薪(まき) 炭(すみ)
  - 耕地への肥料 下草、落葉
  - 用材 家屋、農器具用の木材
  - 食料 木の実、山菜、きのこ、狩猟の場
  - 安らぎの自然空間 文芸の題材、信仰の対象

すなわち、里山とは、身近にある山林(自然)を指すだけではなく、日本民族の辿ってきた森との関わり合いを物語る文化的遺産といえる。里山という用語には、日本列島の原風景といったノスタルジアを感じさせる語感のよさも、近年になり一般的な用語として市民権を得たものであろう〔資料3)より〕。

### (2) 里山の働き

#### 地域の自然条件に適応した植生である

里山二次林は、人手が加わった半自然林であるが、その地域の気候条件や土壌条件に適応して、自然性に富み、地域の風土を反映し、その土地の景観を形成する大きな因子となる。スギ林とコナラ林のモザイク模様のにいつ丘陵の林は、多様性にも富んでいて、市街地と郊外に広がる水田と一体となって、四季を通じて様々な表情をみせ、田園都市新津に潤いをもたらしている。

#### 多様な自然生態系が形成されている

里山林には、植物、野鳥、昆虫、土壌微生物などからなる生物多層社会が形成され、にいつ丘陵には、800余種の植物、100種に近い野鳥、そして多くの昆虫などが息づいている。身近な生物資源として、市民のかけがえのない財産である。

#### 環境保全機能を発揮している

大気浄化、二酸化炭素の吸収と酸素の供給など、とくに都市と接するにいつ丘陵の里山林の機能は、地域の環境保全に極めて重要である。

#### 高い生産機能を潜在している

現在は、薪炭林や用材林としての利用が途絶えているが、木材は再生可能な生物資源であり、循環型社会を目指す資源として、大きな潜在力を秘めている。

#### 自然にふれあう学びの場

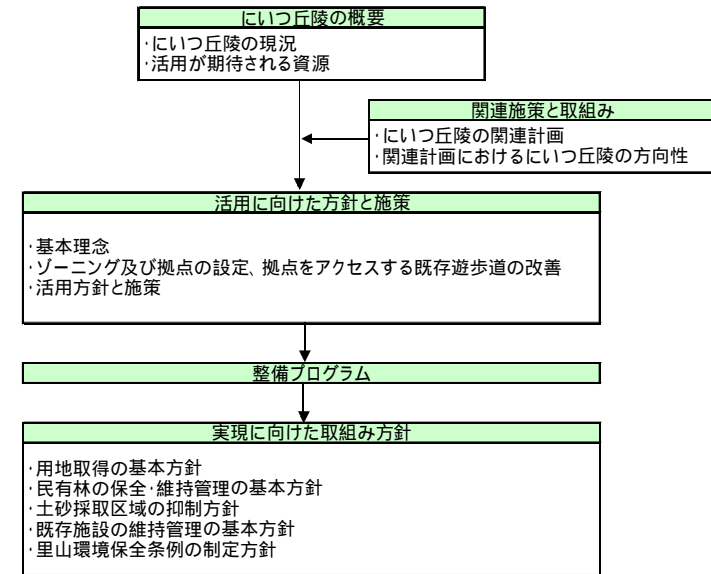
森林浴、自然観察、森づくりなど、人々はいま里山を身近な自然とのふれ合いの場所としてその存在を認識しはじめている。地域に残る身近な自然が存在し、遊歩道が整備されているにいつ丘陵は、自然にふれあう学びの場として市民に対し、重要な位置を占める。

#### 新たな産業創出の場

自然にふれあう学びの場等だけでなく、さらに広域的な人の交流が行われる観光産業や、一方自然がもたらす研究開発産業等、地域産業の活性化・創出が期待される。

〔資料1)より〕

### フ ロ ー



#### 参考とした各計画書の一覧

- 1) 新津丘陵森林調査報告書：遷移と管理法（H11年度、にいつ丘陵森林文化アドバイザー小林正吾）
- 2) 新津丘陵活用計画書（H12年3月、新津市）
- 3) にいつ丘陵里山の森：樹木の季節現象（1）（H14年度、にいつ丘陵森林文化アドバイザー小林正吾）
- 4) 新津丘陵地域交流資源現況調査業務委託（H15年3月、新潟県新津地域振興事務所）
- 5) 新津丘陵地域交流活用検討業務委託（H16年3月、新潟県新津地域振興事務所）
- 6) 新津丘陵活用計画
- 7) 新津丘陵整備実施計画
- 8) 里山の植物(1998)（財）新潟県都市緑化センター、石沢 進）
- 9) 「古津八幡山遺跡」保存整備基本計画報告書(2005)新潟県新津市教育委員会
- 10) 「里山保全活用事業計画」に関する地学・石油関連参考資料(2006)石油の世界館友の会事務局小林 巖雄 他)
- 11) にいつ丘陵里山の生いたちと行方(新津市民大学テキスト)
- 12) 新津市森林整備計画変更計画(H11)新潟県、新津市)
- 13) 新津市市有林(坪ヶ入団地)管理計画書(H16年度、NPOにいがた森林の仲間の会、小林 正吾)